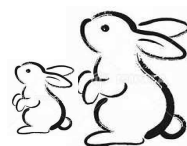




“源溪山だより”

<https://chouanji.p-kit.com/> 令和7年9月①
住職 恩田仁志 gen-chouanji@aka2.gmobbb.jp



◆我が心の宝を育みましょう

夏日・真夏日また熱帯夜が継続するまま9月に入りました。それでも着実に陽の出は遅くなり、また日照高度は下がりつつあり、この酷暑を忘れる日も近いことでしょう。

7日は二十四節気のひとつ「白露^{はくろ}」となります。朝、草花に露がつくようになるころ。日上がるまでのほんの一瞬の美しく輝く朝露は、人の命に例えられます。『修証義』に次の文言があります。

「最勝の善身を徒^{いたず}らにして露命を無常の風^{なか}に任すること勿れ」（一章 第二節）

人としてこの世に生を受け、仏の教えに巡り合えたことは、この上なく尊いこと。ひとたび風が吹けばいつ消えるとも知れない露のような身であるからこそ、無常の風の吹くままに、時を過ごしてはなりません。



さて、9月は長月といいます。夜がだんだんと長くなるので夜長月と呼ばれていたものが略されたとも言われます。

秋の夜と月は、一体の景色となっています。月は一年中あるものの、秋の月には特に畏敬の念を抱いてきたのが私たち日本人ではないでしょうか。

禅の世界において、月はお釈迦さまが開かれた悟りの境地のたとえとして用いられることがしばしばあります。



令和2年9月の塔婆裏文として「水を掬^{きく}すれば、月手に在り（掬水月在手）」という禅語を紹介しました。

月夜に水をすくい月が手の中に宿る、そんな情景です。遥か遠くにあると思っていたお釈迦様の悟りが、私たち自身の中に実現させることができるということです。

大切なことは、「水をすくう」に例えられるように、仏道修行を自らが実践するということです。

今月の塔婆裏文は「蚌含名月」としました。「ぼうがんめいげつ」と読みますが、読み下しは「どぶがいは明月を含む」となります。

蚌
含
名
月

どぶがいは淡水の二枚貝です。川底の泥の中に成育するので、泥臭くまじいことから食用としては忌避されます。ただし貝殻の内側の真珠層が厚くなり、月のような真珠様の玉がとれることも。それは外洋での真珠養殖をするための核になる大切な存在だそうです。



どぶがいとは私たち自身のこと。蚌含名月とは、等しく降り注ぐ月の光、つまり仏の教えを受け取ることができたら、だれでも美しい宝を育めるということを示しています。

秋の彼岸も近くなりました。この一週間には特に六波羅蜜（布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧）の実践に心がけていきましょう。

